

— 資 料 —

## 食育活動推進の一環としての 「食育シンポジウム」開催に関する検討

西川貴子 森下敏子 平野直美 松浦紀美恵 今本美幸  
庄司圭子 羽多悦子 矢木昌子 米山富士子

Evaluation of the Symposiums of Food Education organized  
by our college in the past three years.

Takako NISHIKAWA, Toshiko MORISHITA, Naomi HIRANO, Kimie MATSUURA,  
Miyuki IMAMOTO, Keiko SYOJI, Etsuko HATA, Masako YAGI, Fujiko YONEYAMA

### 要 旨

本学「健康・食育研究会」主催で、地域貢献の一環として、平成17年度より19年度まで開催した3回の食育シンポジウムの内容を振り返り、今後の方向性を検討した。それぞれの食育シンポジウムの内容の概要、参加者のアンケート結果および意見、感想、参加者の状況を検討し、本学開催の食育シンポジウムの現状分析を試みた。その結果から、シンポジウム開催の時期、開催情報の広告媒体、シンポジウムのテーマと対象者の焦点化などの検討課題が明らかとなった。また参加者の感想からは、本学の食育活動に対する期待感が推察でき、神戸女子短期大学の食育活動がさらに地域に定着するように、今後もより内容の充実した食育シンポジウムの継続を推進していきたいと考える。

キーワード：食育、食育シンポジウム、地域貢献

### I はじめに

平成17年7月に食育基本法が施行された。食育基本法では、子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくためには、何よりも「食」が重要であるとされ、食育は、生きる上での基本であって、知育、徳育および体育の基礎となるべきものと位置づけられており、<sup>1)</sup> 具体的には、家庭、学校、保育所、幼稚園、地域などにおける食育の取り組みを推進しようとするものである。

食育基本法を具体的に実施する「栄養教諭」制度も確立され、学校・家庭・地域が一つにまとまって食教育が進められつつある。「給食」の時間を使った食指導だけでなく、小・中学校の「総合学習の時間」や家庭科、保健体育、生活指導など様々な時間に栄養教諭が活躍するよ

うになってきた。さらに、子どもと大人を含めた親子料理教室が行われ、五感を使った教育が行われており、食の見直しや啓蒙活動は、日本各地で広がりを見せている。

本学の特徴として、栄養士と栄養教諭を養成する「食物栄養学科」、中学校（家庭科）教諭を養成する「総合生活学科」、小学校・幼稚園教諭を養成する「初等教育学科」、保育士を養成する「専攻科保育専攻」（平成18年度スタート、20年度に完成年度を迎える）がある。保育士養成にあたっては時代や社会のニーズに対応して食育を特色とした保育士養成を目指すことをコンセプトとしている。

そこで、食育に関心の高い教員有志を中心に「健康・食育研究会」を立ち上げ、食育活動の一環である「食育シンポジウム」を開催した。地域の人に食に関心を持ってもらうために、大学としてレベルの高い最新の食に関する情報を分かりやすく提供し、また、地域の人々から様々な問題点などの情報を得て、コミュニケーションの場ともなるようにし、本学の食育への取り組みを地域にアピールし、食に関する意識を浸透させることを目的とした。シンポジウム開催にあたっては、初等教育学科の学生・教員により、託児ルームを開設し、幼児をもつ母親も参加できる体制（環境）を整え、学生にとっては、保育実践の場とすることも目的とした。

平成17年8月8日に第1回食育シンポジウム「幼児期の食を考える」を開催し、平成19年3月3日に第2回食育シンポジウム「子どもたちに豊かな食卓を」、平成19年10月28日に第3回食育シンポジウム「次代に伝えたい食—自然と親しむ食育を一」を開催した。

いずれも本学の特徴を活かし、シンポジウムの内容は、子どもの食育に焦点を当て、幼稚園・保育園関係者やその保護者、栄養士、行政関係者など食に係わる人々を主な対象者として開催してきた。3回という回を重ねたところで、開催内容を見直し次回に繋げたいと思い検討した。

## II 方法

平成17年度、18年度、19年度と3回の食育シンポジウムを開催した。その内容と参加者の状況、アンケートの結果などをまとめ、検討した。

## III 結果

### 1. 第1回食育シンポジウムの内容

- (1) 開催日時 平成17年8月8日（月）午後1時～4時30分
- (2) 場所 B館403
- (3) テーマ 幼児期の食を考える
- (4) プログラム
  - ① 基調講演 演題：「未来につながる子どもの食—体感食育のすすめ」  
基調講演者：坂本廣子氏（本学非常勤講師，食育・料理研究家）
  - ② パネルディスカッション

## 【パネリスト】

基調講演者：坂本廣子氏

行政関係：船越泰子氏（神戸市保健福祉局子育て支援部主査）

幼稚園関係：庄司圭子氏（神戸市立すずかぜ幼稚園園長）

保育園関係：西躰通子氏（社会福祉法人二人同心会ポートピア保育園園長）

コーディネーター：森下敏子（本学食物栄養学科教授）

### (5) 内容の概要

#### ① シンポジウムの内容

第1回食育シンポジウムは、「幼児期の食を考える」をテーマに開催した。現代の幼児を取り巻く食環境の問題点を様々な視点から検証し、幼児期の望ましい食のあり方や、子どもたちの心身の健全な発達のための食育の実践を検討することを主旨として「健康・食育研究会」の初回のシンポジウムとなった。対象者はPTA（保護者）、保育所、幼稚園関連の教職員、大学関係者とし、各関係団体にチラシ、およびポスターを配布、また学園のホームページからも広報活動を行った。その結果、猛暑にも関わらず、短大B館AVホールの会場に、100余名の参加者があった。

今回のシンポジウム開催にあたり、神戸市と神戸市教育委員会からの後援名義使用の承諾を受け、神戸市の保育所、幼稚園関係者への案内など、多大な協力と支援を得ることができた。また神戸新聞、産経新聞、毎日新聞に食育シンポジウムの開催案内が掲載され、多くの人々から参加に関する問い合わせもあった。

基調講演では、「未来につながる子どもの食一体感食育のすすめ」というテーマで、坂本廣子氏から、幼児期の体験の重要性、今の子どもたちに不足している基礎体験をいかに増やしていくかということについて、坂本氏主催の子ども料理教室「五感で学ぶ料理教室キッズ☆キッチン」でのエピソードなどをまじえた、分かりやすく説得力のある講演を頂いた。五感を全部使う体験は食であり、私たち大人は、子どもたちに食の体験ができる機会をできるだけ多く提供する。その体験により子どもたち自身が食に関する多くのことを発見し、その体験で学んだことはその子の将来に大きく影響していく。大人は言葉で教えるのではなく、食体験の機会を如何に多く提供するかという食育が、次世代に残していける大きな力を持っているのではないかという内容であった。

パネルディスカッションでは、森下敏子をコーディネーターとして、まず始めに、行政の立場から船越泰子氏の「楽しく食べる子どもに」をテーマにした講演があった。保育所における食育指針を中心に、子どもたちの食育のあり方や食生活のポイントについての内容であった。次に保育所の立場から西躰通子氏は、「私の園の食育実践」をテーマに、ポートピア保育園で実施している給食と子どものサイズに合わせたシステムキッチンでのクッキング保育などの食育実践とその取り組みの目標についての講演があった。さらに幼稚園の立場から庄司圭子氏は、

「幼稚園における食育を考える」をテーマに、神戸市立すずかぜ幼稚園での親子の野菜栽培、家族と一緒に食べる弁当参観、地域の人を招待して行なう収穫祭などの食育実践についての内容であった。

その後、基調講演者とパネリストによるパネルディスカッションを行い、現代の幼児をとりまく食環境の問題点や課題を検討し、幼児期の望ましい食育のあり方を討議した。会場からは、「食育の重要性は理解しているが、どういうふう実践をしていけばいいか悩んでいる。」「子どもの偏食に悩んでいるのでその解決策を知りたい。」、また、アレルギー症状の子どもを持つ保護者からの質問などがあり、質問に対するパネリストのそれぞれの立場からのアドバイスや活発な意見交換が行なわれた。

なお、食育シンポジウム開催にあたり、食物栄養学科の5名の学生のボランティアの参加、協力があり、学生たちはシンポジウムの運営にかかわり、大活躍であった。

また、会場設営、託児ルーム設営に当たっては、施設課の協力を得た。

## ② 託児ルームの状況

食育シンポジウム参加者の子どもを対象に、野中千都氏（本学元講師・保育士）他、初等教育学科教員と学生20名により託児ルームを開設した。定員15名で募集したが、0歳から9歳までの16名の託児申し込みがあり、当日は、15名の子どもが参加した。B407教室で、自由遊び、絵本の読み聞かせ、人形劇の上演、エプロンシアターを楽しみ、お昼寝後は、「菜園」できゅうりやトマト、なすびを収穫した。保護者からは、「安心して子どもを預けることができました。食物栄養学科と初等教育学科の2つの学科があるから、こういう企画もできるのですね。」という感想があった。学生たちの机上の学びが実践になり、学生の満足度も高く、次の学びへの意欲へとつながり、よい結果となった。

## ③ 参加者のアンケート結果および意見・感想

- a. アンケート回答数：78人（男性2人，女性76人）
- b. 職業の有無：職業あり43人，職業なし30人，学生2人，無回答3人
- c. 年齢：20歳代18人，30歳代21人，40歳代12人，50歳代20人，60歳代4人，無回答3人
- d. 食育シンポジウムを知ったきっかけ：新聞7人，広告4人，ホームページ6人，  
公共施設14人，チラシ7人，知人11人，通園・通学先2人，その他31人
- e. 居住地：神戸市47人，神戸市以外31人（西宮市3人，伊丹市5人，芦屋市2人，  
宝塚市1人，川西市8人，明石市2人，稲美町1人，三木市1人，大阪府5人，  
奈良県1人，京都市1人，無回答1人）
- f. 参加者からの意見・感想

参加者からは、食育についての考え方が理解できた、自分の子どもを見守る目を変え

ていけないといけないなどの感想、また幼稚園や保育所関係の方からは、自分の園での指導に役立てたいという感想が多かった。さらに、神戸女子短期大学の食育に対する使命感や姿勢に共感するという意見、託児に対する感謝の言葉、また、2回3回と開催を続けてほしいという要望など、前向きな意見や感想があった。

## 2. 第2回食育シンポジウムの内容

(1) 開催日時 平成19年3月3日(土)午後1時～4時30分

(2) 場所 D館501

(3) テーマ 子どもたちに豊かな食卓を

(4) プログラム

① 基調講演 演題：「子どもたちから発信する“豊かな食卓”」

基調講演者：足立己幸氏（名古屋学芸大学大学院教授・女子栄養大学名誉教授）

② パネルディスカッション

### 【パネリスト】

基調講演者：足立己幸氏

行政関係：森口恵子氏（神戸市保健福祉局健康部地域保健課主査）

保護者関係：山智美氏（おぶ子育て親育ち応援団団長）

本学関係：平野直美（本学食物栄養学科准教授）

コーディネーター：森下敏子（本学食物栄養学科教授）

(5) 内容の概要

① シンポジウムの内容

第2回食育シンポジウムは、「子どもたちに豊かな食卓を」をテーマに開催した。保育所・幼稚園関係者、行政関係者、大学関係者など80余名（学外46名）の参加者と、託児ルーム利用児が5名あり、盛会のうちに閉会した。

今回も、神戸市と神戸市教育委員会から後援名義の使用承諾を受けることができ、神戸市関係者への案内など、多大な協力と支援を得た。ポスター100枚、チラシ1,000枚を印刷し、神戸市を通じて配布をお願いしたり、ポートアイランド内はメンバーが手分けして持って回ったり、昨年度の参加者で次回案内希望者38名にはダイレクトメールを送るなどの広報活動を行った。また学園のホームページからも広報活動を行い、サンテレビのニュースEyeランドのイベント情報コーナーにおいて食育シンポジウムの案内を流して頂いた。

シンポジウムは、まず、「子どもたちから発信する“豊かな食卓”」と題して足立己幸氏の基調講演があった。足立氏は食生態学を専門とされ日本の「食育」研究の第一人者である。食生態学研究の最新の成果を踏まえ、子どもの豊かな「食」づくりの主人公は子ども自身であり、大人や専門家たちは、豊かな経験を生かすサポーターであるということ、また「食」の問題や

課題を考えあうことや、実行できる環境をつくっていくことの大切さについての講演であった。

その後、森下敏子をコーディネーターとしてパネルディスカッションが行われた。始めに、行政の立場から森口恵子氏に「神戸市における食育の取り組みの現状」について、保護者の立場から、山智美氏に「家庭における豊かな食卓の実践」について、平野直美からは「食とこころの関係」についての講演があった。次に基調講演者と3人のパネリストによるパネルディスカッションが行われた。「子どもたちに豊かな食卓を」をテーマに、足立氏の講演での提案である「食」（かぎ括弧つきの食）について、今日考えあいたいことを様々な観点から討議された。会場からは偏食についての質問があったが、パネリストより適切なアドバイスがあり終了した。

尚、この度のシンポジウム開催において、食物栄養学科学生5名のボランティアと施設課の協力を得た。

## ② 託児ルームでの状況

前回同様、野中千都氏（本学元講師・保育士）他、初等教育学科の教員と学生10名で託児ルームを開設した。場所はD203とD206を使用した。申し込みは7名あったが、参加した子どもは、8ヶ月男児、1歳男児、2歳3ヶ月男児、5歳と7歳の女児の5名であった。今回は年齢・月齢が小さく、学生は、現実に泣く子どもの対応に戸惑っていたようである。乳幼児への基本的な対応方法について、学生への指導を検討する必要がある。学生からは、「楽しかった」「また参加したい」との意欲が感じられる感想があった。今後も学生の学びの場になるように、教員の連携とサポート体制が必要である。

## ③ 参加者のアンケート結果および意見・感想

- a. アンケート回答数：29人（男性0人、女性29人）
- b. 職業の有無：職業あり17人、職業なし9人、無回答3人  
（栄養士・管理栄養士8人、調理師3人、公務員4人、販売業1人、アルバイト1人）
- c. 年齢：20歳代9人、30歳代6人、40歳代7人、50歳代4人、60歳代2人、70歳代1人
- d. 食育シンポジウムを知ったきっかけ：新聞2人、広告0人、ホームページ0人、  
公共施設1人、チラシ5人、知人11人、通園・通学先3人、その他7人
- e. 居住地：神戸市25人（中央区4人、長田区2人、兵庫区2人、灘区8人、北区4人、  
垂水区1人、西区1人、東灘区3人）  
神戸市以外4人（高槻市1人、尼崎市1人、川西市1人、無回答1人）
- f. 参加者からの意見・感想

参加者のアンケートからは「今回、このシンポジウムに参加させていただき大変参考になるお話を聴くことができました。又、視野も広がったような気がします。今後、職

場だけでなく私生活にも生かしていこうと思います。」「託児があり、本当に助かりました。また食育シンポジウムやセミナーがあればぜひ参加したいです。その時はまた託児をお願いします。」等の意見があった。

### 3. 第3回食育シンポジウムの内容

(1) 開催日時 平成19年10月28日（日）午後1時～4時30分

(2) 場所 D館501

(3) テーマ 次代に伝えたい食—自然と親しむ食育を—

(4) プログラム

① 基調講演 演題：「植物も元気に育つ」

基調講演者：森本直明氏（神戸女子大学文学部教育学科教授）

② 実践報告

実践報告Ⅰ：五感を育てる栽培活動

西鉢通子氏（社会福祉法人二人同心会ポートピア保育園園長）

実践報告Ⅱ：初等教育学科の「わくわくFarm」

庄司圭子（本学初等教育学科准教授）

実践報告Ⅲ：豆を使った食育提案

西川貴子（本学食物栄養学科教授）

松浦紀美恵（本学総合生活学科講師）

(5) 内容の概要

① シンポジウムの内容

第3回食育シンポジウムは、「次代に伝えたい食—自然と親しむ食育を—」をテーマに開催した。保育所・幼稚園関係者、地域住民、大学関係者など80余名（学外46名）の参加者と、託児ルーム利用児が4名あり、盛会のうちに閉会した。

今回は、社団法人フードスペシャリスト協会の共催が得られ、また、神戸市と神戸市教育委員会から後援名義の使用承諾を受けることができた。また、大学コンソーシアムひょうご神戸地域交流委員会連携事業の一つとして実施した。

ポスター100枚、チラシ1,000枚を印刷し、神戸市保健福祉局健康部地域保健課・同子育て支援部、神戸市教育委員会、神戸市私立保育園連盟、神戸市私立幼稚園連盟、神戸市総合福祉センターこべっこランド、ポートアイランド内幼稚園・保育園・自治会などへチラシを配布し、昨年、一昨年の参加者で次回案内希望者60名にはダイレクトメールを送るなどの広報活動を行った。また、学園の広報部から記者発表を行なってもらい、ホームページにも掲載した。

シンポジウムは、まず、「植物も元気に育つ」と題して、森本直明教授の基調講演があった。森本氏は生物学を専門とされ、本学初等教育学科のわくわくファームも、神戸女子大学の愛愛

ファームもコーディネートされている。植物が育つ過程や育つ条件など科学的な講義の後、実際にいちごや落花生の育て方について分かりやすく説明され、植物を育てる根底には生きる力と命を育てることがあり、子育てに通じるものがあると述べられた。

その後、実践報告Ⅰとして、西躰通子氏の「五感を育てる栽培活動」についての講演があり、保育園児に自然界の食物連鎖を、栽培を通して分かりやすく教える方法についての内容であった。

実践報告Ⅱとして庄司圭子の初等教育学科の「わくわくFarm」についての講演があった。港島幼稚園児と初等教育学科学生が、ブロッコリーやさつまいもなど野菜の栽培を通じた交流で、子どもたちには植物を育てる楽しさを、学生たちには食育に強い保育士養成をめざす教育についての実践報告であった。

実践報告Ⅲとして西川貴子と松浦紀美恵による「豆を使った食育提案」があった。大豆は日本文化を代表する食品で、健康維持のために大切な食品であることなど、大豆についての栄養的な説明の後、大豆を使った料理の試食があった。まず、市販の煮豆と手作りの煮豆の味や風味の違いを感じてもらった後、季節の野菜を使った「豆乳グラタン」を味わってもらい、最後にきな粉を使ったおやつ「きなこあめ」を試食してもらった。

最後に質疑応答の時間があり、会場からは野菜の栽培や大豆を使った料理の質問など活発な意見交換があり終了した。今日学んだことを実践に移してもらうため、いちごの苗を参加者に配布した。

尚、この度のシンポジウム開催において、学生ボランティアの協力を得た。食物栄養学科学生4名、総合生活学科3名が試食の調理を、神戸女子大学学生（管理栄養士養成課程）2名が受付などの業務を、初等教育学科8名の学生が託児を担当した。会場準備には、施設課の協力を得た。

今回は、読売新聞の記者が取材にこられ、翌日の朝刊の地域版に、「食育の実践、利点報告」というタイトルで掲載された。

### ③ 託児ルームの状況

矢木昌子（本学講師・保育士）他、初等教育学科の教員と学生9名で託児ルームを開設した。場所はD203とD206を使用した。申し込みは4名あったが、参加した子どもは、1歳4ヶ月男児、5歳と7歳の女児の3名であった。1歳4ヶ月児は歩き始めたばかりのため、動き回れる広いスペースを用意しハイハイ、手押し車（カタカタ）、トランポリン、ボールなどで存分に遊べるようにした。年齢の高い女児2人はままごとなどのおもちゃでじっくり遊べるようにした。子どもたちは終始機嫌よく過ごしていた。1歳4ヶ月児は、まだ言葉が出ていなかったが、学生の言葉かけによく反応してくれ、学生は子どもへの愛情もわき、学びながら子どもと過ごす楽しさを味わえたようである。学生たちは事前指導をよく守り、子どもも落ち着いて過ごす



ことができた。学生の感想では、子どもと接する楽しさと喜びの体験ができたことや、次回も参加したいという意欲的な言葉も聞かれた。

託児時間として4時間は子どもにかかる負担が大きく、2時間半が限度である。今後の計画には、子どもに負担がかからない配慮も必要である。

### ③ 参加者のアンケート結果および意見・感想

参加者のアンケート結果を以下に示す。

- a. アンケート回答数：21人（男性1人，女性20人）
- b. 職業の有無：職業あり17人，職業なし2人，無回答2人  
（栄養士・管理栄養士8人，調理師3人，保育士4人，会社員1人，アルバイト1人）
- c. 年齢：20歳代5人，30歳代4人，40歳代4人，50歳代6人，60歳代1人，70歳代1人
- d. 食育シンポジウムを知ったきっかけ：新聞・広告1人，ホームページ0人，  
公共施設1人，チラシ3人，知人4人，その他12人
- e. 居住地：神戸市18人（中央区4人，長田区3人，兵庫区3人，灘区1人，北区4人，  
垂水区1人，須磨区1人，東灘区1人）  
神戸市以外3人（茨木市1人，芦屋市1人，無回答1人）
- f. 参加者からの意見・感想

参加者からは、「食育の大切さや楽しさが伝わり，自分も今後何かの形で関わっていただけらと思います。」「聞いて，見て，触って，味わってという体験型の楽しいシンポジウムでした。」「様々な角度から食育の話を知ることができてとてもよかった。」「年1回のシンポジウムですが，毎年楽しみに待っています。」「とても興味深く，どの講話も生活や保育の中で，実践できると感じました。」「シンポジウムの内容もバランスがとれていて，最後まで楽しめました。」などの感想があった。

## 4. 3回のシンポジウム参加者の状況

3回のシンポジウムにおける参加者のアンケートからその状況をまとめたものが，図1～5である。参加者のほとんどが女性であり，半数以上が職業を持った人である。主な職業は，栄養士・管理栄養士，調理師，保育士である。参加者の年齢構成については，特に特徴はなく，20代から50代で約90%を占めている。開催情報を得た媒体については，知人よりも比較的多く，チラシやホームページからの割合が少なく，効果が表れていない状況である。参加者の居住地については，1回目は神戸市以外からの参加者が比較的多かったが，全体的に神戸市内がほとんどである。

図1 参加者の性別

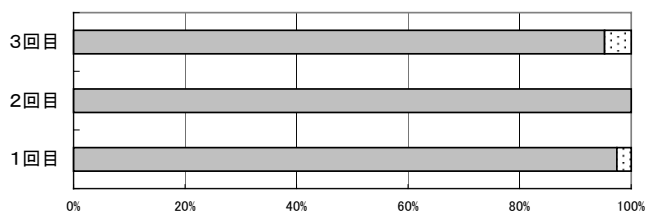


図2 参加者の職業の有無

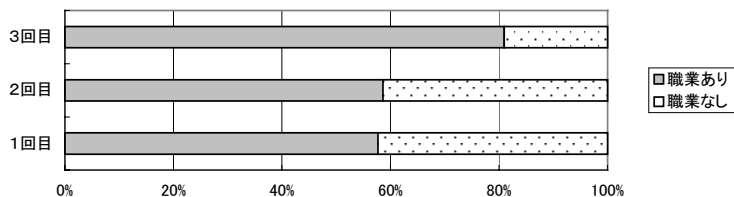


図3 参加者の年齢構成

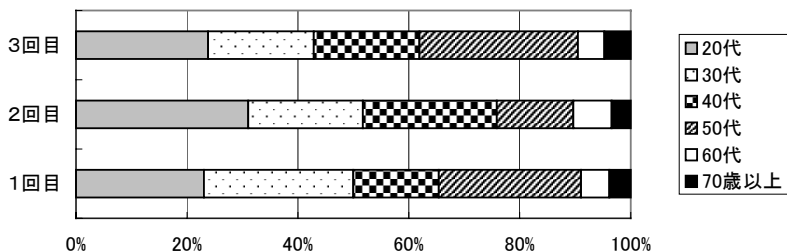


図4 開催情報を得た媒体

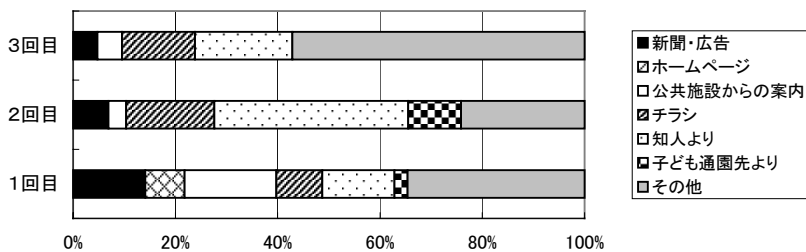
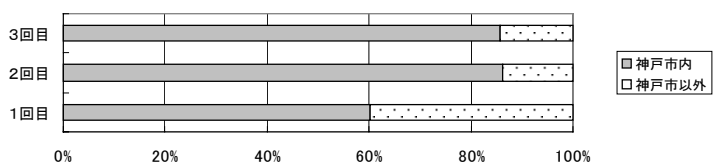


図5 参加者の居住地



#### IV 考察

神戸市では、平成19年3月に「食を楽しむ」「食を大切に」「食と健康に関心をもつ」を食育の目標とした「神戸市食育推進計画」が発表された。2010年（平成22年）を目標年次として、家庭はもとより、保育所（園）、幼稚園、学校、地域、食料生産者など食にかかわるあらゆる関係機関・団体等が連携し、食育を総合的かつ計画的にすすめることにより、健康で豊かな、活力ある社会の実現をめざすとされており、<sup>2)</sup> 食育推進活動が展開されている。

本学の食育シンポジウム開催に当たっては、特に子どもの食育に焦点を当てた内容で、3回のテーマは、「幼児期の食を考える」「子どもたちに豊かな食卓を」「次代に伝えたい食—自然と親しむ食育を—」として進めてきた。それは、本学が栄養教諭や保育士の養成施設であるためであり、地域の保育所、幼稚園、小学校との連携や情報交換の場とするためである。

開催時期に関しては、第1回目は、8月8日（月）で、夏休みに入った直後、第2回目は3月3日（土）で後期の授業が終わった後、第3回目は10月28日（日）後期の授業の最中であるが、幼稚園や保育所の行事のない時期である。

内容に関しては、1回目と2回目は基調講演とシンポジウムという形であったが、3回目は、社団法人フードスペシャリスト協会の共催が得られこともあり、少し志向を変え、基調講演と実践報告とし、料理の試食を加え、また講演内容を実践してもらった題材として「いちごの苗」を配布するなど、体験学習を加えた。

参加者数に関しては、第1回目は夏休み期間中であったため、外部からの参加者は80余名あったが、第2回目・3回目は休み期間でない土曜日と日曜日であったためか、1回目の約半数の40名余りであった。

しかし、参加者の感想を見ると、本学に対する期待感が感じられ、継続する意義が認められた。

今後の課題として、開催時期を一定時期に決めるか、また、参加対象者層を教職関係者に焦点を絞るか、保護者または地域の住民の方々に絞るかなど、本学の取り組みとして今後どのように食育シンポジウムを展開していくかを検討していく必要がある。しかし、食育基本法の内容は多岐に渡っており、食育活動は幅の広いものであるため、内容に関しては、食育基本法に沿った内容とし、その内容にふさわしい対象者に開催情報を的確に配信する工夫が、今後必要である。今回、明らかとなった検討課題を改善し、より内容の充実した食育シンポジウムの継続を推進していきたいと考える。

#### V おわりに

3回の食育シンポジウムを開催したが、いずれの回も参加者の本学に対する期待が大きいものと推察できる。今後も4回、5回と回を重ね、神戸女子短期大学の食育活動が地域に定着するように推進していきたい。



第1回シンポジウムの様子



第2回シンポジウムの様子



第3回シンポジウムの様子

参考文献

- 1) 西川貴子・森下敏子・中尾美千代・今本美幸著, 栄養学実習Ⅱにおける食育導入の一考察, 神戸女子短期大学『論攷』第52巻, 49-59, 2007
- 2) 神戸市食育推進計画2007